OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	事態概念の記号化に関する認知言語学的研究
Author(s)	谷口, 一美
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44598
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	谷口一美（たにぐち かずみ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 18270 号
学位授与年月日	平成16年1月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**事態概念の記号化に関する認知言語学的研究**
論文審査委員	（主査） 教授 河上 誓作 （副査） 教授 大庭 幸男　助教授 渋谷 勝己

論文内容の要旨

本論文は、認知言語学的観点に基づき、事態概念の記号化について英語および日本語の文法構文に関わる諸問題を幅広く分析し考察したものである。論文の構成は9章から成り、分量は400字詰め原稿用紙に換算して約1200枚に相当する。

本論文の前半では、具体的な事象の分析の前提となる基本的な文法的概念について、認知言語学的な定義づけを行う。第1章で認知言語学の理論的概要を述べた後、第2章では事態概念を適切に表示する事態概念モデルを導入し、それに基づき節表現に含まれる主語・目的語といった文法関係の意味的・概念的基盤を提示し、文法関係の選択が話者の概念化のあり方に動機づけられたものであることを詳細に議論する。第3章は他動詞の意味を扱い、他動性の程度差が認知的観点から把握可能であることを示し、さらに動詞の意味と構文の意味の相互作用を最適に表示し得る方法を事態概念の観点から提案する。第4章では「非能格動詞」「非対格動詞」という伝統的な自動詞の分類が実際には典型的事例から拡張した放射状カテゴリーを形成していると提案することにより、非対格性に関する先行研究の問題点が解決されるだけではなく、非対格性が意味的・概念的基盤を有することが明らかになることを示す。

以上の議論に基づき、本論文の後半では共時的・通時的側面および日英語の対照から多角的に特定の言語事象の分析を行う。第5章は英語の中間構文（This car drives easily.）を取り上げ、この構文に見られる主語選択をはじめとする文法的・意味的特異性を認知的要因から説明し、この構文が表す事態概念を提示すると共に、それによって中間構文に共起可能な他動詞の制約を明らかにする。第6章では、英語の知覚動詞の連結的用法（John looks happy.）を扱い、この用法が成立した歴史的過程を観察することにより、現在は特異に思われるこの用法が、本来は自然な表現から拡張の連鎖を辿って生じたものであることを明らかにすると共に、言語の動的側面を捉える認知言語学的モデル化の有効性を示す。次の第7章および第8章は日英語の対照研究である。第7章では事態解釈の際に基本単位となる事態概念が日英語で異なっていて、日本語ではthematic relationが、英語ではtransitive relationが、その基本的単位として機能していると主張する。そうした事態概念の枠組みの相違が両言語での動詞の語彙化や文法構文の生産性の相違に一貫して反映されていることを示し、さらに従来直感的に「英語らしさ」「日本語らしさ」として捉えられてきた現象に認知言語学的な根拠が与えられることを示す。第8章では「事態が事態を引き起こす」という高次の事態概念を想定し、この事態概念を記号化する構文として日本語の被害受け身文、英語の擬似目的語構文を特徴づけ、それらの構文に共通して課される非能格性の制約が高次の事態概念の構造に由来すると分析することにより、体系的な説明を試みる。さらに、高次の事態概念の記号化には第7章で提案した日英語の事態解釈の基本単位のみが適用さ

れており、ある言語での構文の存在・非存在が事態概念レベルでの相対性によって動機づけられる可能性があることを示す。第９章は議論全体の総括である。

以上、本論文は、事態概念を節表現へ言語的に記号化する際の認知的メカニズムを多角的に探求し、文法構文をはじめとする言語現象が有する概念的基盤の重要性を議論したものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知言語学の諸理論を理論的前提として、事態概念の記号化の観点から英語および日本語の文法構文に関わる諸問題を幅広く分析し考察したものである。認知言語学の諸理論は、言語の記号性・有契性・主観的意味論を主張する点で共通しているが、本論文はこうした観点から「事態概念の記号化」に焦点をあて、関係する言語現象を統一的に説明することに成功していて、極めて高水準にある研究として高く評価できる。議論の展開は明快で、論文としてのまとまりにも優れ、随所に鋭い観察が見られる。特に、日英語の表面的には多岐にわたる構文を事態認知という一貫した視点のもとで分析し、英語の transitive relation 指向、日本語の thematic relation 指向といった特徴によって対照的に把握したところは卓見であり、日本語学界にも貢献するところが大きい。また、なぜ日本語には「被害受け身文」があるのかといった、日本語学界が問うてこなかった問題も、同じ枠組みで統一的に説明しようとした試みは斬新である。

しかしながら、次のような点はさらに発展さすべき今後の課題として残されているように思われる。①中間構文の Agent は明示されないが含意されるという主張については、中間構文には Agent があるという証拠を指摘する論文もある。②CPV 用法の拡張説にはさらなる証拠がほしい。③経路や起点のような要素がなぜ「を」格で標示されるかという問題は詳細に検討されているが、対象が「が」格で標示されるケースへの言及もほしい。④日本語の中間構文など、その範囲や性格が十分に規定されないままに議論が進められているところもある。⑤第７章や第８章は多くの事象を取り上げたために分析にやや浅さが目立つ箇所があるのは残念である。

このようにいくつかの問題点は残るが、これらはむしろ今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであり、本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。